一般社団法人　京都わかくさねっと

２０２５年度事業報告

（２０２５年４月１日から２０２６年３月３１日まで）

１　総論

当法人は、「支援する／される」という関係を超え、多様な立場の人々がともに過ごし、お互いの尊厳を守りあう「場」を地域につくることを使命としている。本年度は、その歩みが二つの大きな節目を迎えた一年であった。

第一に、更生保護に関する休眠預金活用事業の三か年が完了し、活動の軸足が「困難を抱える少女」への支援から「少女の回復を支える地域」づくりへと広がった。地域に包摂的な場が定着しつつあることの一つのあらわれとして、令和 7 年 11 月、こども家庭庁「未来をつくる こどもまんなかアワード」において「こども・若者活動奨励章」を受章した。

第二に、少女支援において、居住支援という新たな一歩を踏み出した。アウトリーチでの出会いから、短期シェルター・シェアハウス・ステップハウスへと続く、住まいと安全を土台とした連続的な支援の形が見えてきた。あわせて、支援される側にとどまらず、自らの「やりたい」に挑戦できる活動（「君は未知数」事業）へと踏み出す少女の姿も生まれた。本年 1 月には、団体設立 10 周年（法人設立 8 周年）を記念して「わかくさまつり」を開催し、これまでとこれからをつなぐ機会とした。

こうした広がりの背景には、現在の社会状況がある。物価高騰による格差の拡大と人々の個別化が進み、暮らしのなかから生のコミュニケーションが失われつつあること――それ自体が、多くの人の「生きづらさ」の一因になっていると、私たちは現場で感じている。だからこそ、誰もが理由を問われずに居られる場、そして主体的に活動できる場の意味は、年々大きくなっている。

本年度、わかくさカフェ（年 151 回・延べ 1,575 名）と大人こども食堂（年 50 回・延べ 1,147 名）には、あわせて延べ 2,700 名を超える人々が訪れた。また、シェアハウス・ステップハウスでは年度末時点で計 6 名が共同生活を営んだ。

２　地域づくり（包摂社会の実現）

（１）休眠預金活用事業／地域コミュニティ事業

更生保護に関する休眠預金活用事業（三か年）を本年度に完了した。ホゴちゃんハブを核とした「食と居場所」を通じて、地域のなかに更生と再出発をやわらかく支える関係性を育ててきた。（事業内容の詳細は休眠預金活用事業 事後評価報告書を参照）

あわせて、カフェでは、まちづくりカフェ等のさまざまな勉強会や、交流会、町内会の会合等への利用を促進した。また学区内のいきいきサロンでの、親子イベントでの食事提供や町内清掃等を協力し、「誰もが『声』を取り戻す地域の居場所づくり」をテーマに、孤独・孤立対策の実践調査に取り組んだ。〔地域における孤独・孤立対策に関するNPO等の取組モデル調査／NTTデータ経営研究所委託、令和7年6月27日～令和8年2月10日〕

（2）わかくさカフェ／NINIROOMのわかくさカフェ／大人こども食堂

わかくさカフェは、誰もが理由を問われずに立ち寄れる、低い敷居の地域の居場所として、1階で運営している。本年度は年151回開催し、延べ1,575名が訪れた。300円の手づくりランチを提供し、創作のできるアートスタジオを併設、相談支援員を配置することで、地域の困りごとを受けとめる場となった。

NINIROOMのわかくさカフェは、hostel NINIROOM（左京区）を活用し、少人数制のワークショップ・ランチ提供・相談対応を行う居場所である。技能習得よりも「おしゃべりしながら人との関係を育む」ことを目的とし、日中の個室休憩（おひるね）や生活物資の提供もあわせて実施した。本年度のワークショップは年間18回を数えた。

大人こども食堂は、子どもも大人も世代を問わずに無料で食卓を囲む共食の場として、年50回開催し、延べ1,147名が参加した。カフェや食堂を続けるなかで、少女たちだけでなく、犯罪歴のある方やかつて反社会的な組織に属していた方も足を運ぶようになり、少女たちをそっと見守る存在となっていった。最も排除されやすい人をも受け入れる場こそが必要であることを、実感した一年であった。

（3）物価高騰生活困窮事業

物価高騰の影響を受ける方々への支援として、おせちや支援物資、わかくさカフェの無料券の配布を行った。〔京都府物価高騰対策・生活困窮者支援事業〕

（4）更生保護に関する取り組み（発信・勉強会・協働）

・映画「プリズン・サークル」上映会とワークショップを開催。指導教官・毛利真弓氏とのワークショップには、保護司・保護観察対象者・一般市民が参加し、更生保護の意義を広く伝える機会となった。
・少年院入所経験のある心音さんの冊子「贈り物」の詩をはじめ、少女たちの言葉を地域で展示した。11月30日には左京区ふれあいまつりにて左京保護司会と合同で、1月19日～24日にはゼスト御池で展示を行い、どちらの会場でも松井市長にもご覧いただいた。
・OD（オーバードーズ）についての勉強会を左京保護司会と協働で開催し、保護司会のなかでのオープンダイアローグの実践にも取り組んだ。

〔京都市 犯罪や非行をした者の居場所づくり等支援事業 ほか〕

（５）地域の居場所を支える財源について

これらの地域の居場所は、単一の助成によってではなく、複数の財源を費目ごとに組み合わせて運営している。ひとつの場を複数の制度が少しずつ支えるこの形は、どの制度の枠にも完全には収まらない「地域の居場所」を現実に成り立たせるための工夫でもある。主な対応は次のとおり。

	主な財源
1 階の場所（家賃/光熱費）	休眠預金活用事業（ホゴちゃん HUB）
カフェ・食堂の人件費	NTT データ経営研究所 受託調査
アートスタジオや相談機能	NTT データ経営研究所 受託調査
わかくさカフェの食材（10 月～）	京都府物価高騰対策・生活困窮者支援事業
大人こども食堂の食材	京都府「こどもの城」事業

３　少女支援活動

住まいと安全を土台として、少女・若年女性一人ひとりの状況に応じた連続的な伴走を行った。（人数・件数等の細目は別表のとおり）

（１）アウトリーチ

夜の繁華街やイベント会場に小さなテントを設置し、声かけ・食事提供・傾聴・支援先案内を行った。少女自身がスタッフとして参加し、当事者同士のピアな関係から信頼を築くことを重視した。〔京都市若年被害女性等事業補助金事業（女性新法モデル事業）／京都朱雀ライオンズクラブ共催〕

主なアウトリーチ・出張居場所（抜粋）

- 8 月 31 日　立誠ひろば
- 9 月 15 日　かもがわデルタフェスタ
- 11 月 15 日　京都市大文化祭（市役所前・ゼスト御池）
- 11 月 30 日　左京区ふれあいまつり
- 12 月 13 日　立誠ひろば
- 10 月以降　毎月第 3 金曜　市役所前（小さな芝生広場の実験）
- 夜間見回り（巡回　京都駅周辺～木屋町三条界隈）を毎月 1 回実施。

アウトリーチ後は SNS への相談・問い合わせも増加した。

（２）居住支援

滞在期間と緊急度に応じて、次の三つの住まいを運営した。

- 短期シェルター（一時利用）：今夜の安全を確保する場として、行政・NPO からの依頼を受け、NINIROOM の個室やシェアハウスを活用して受け入れた。〔京都市若年被害女性等事業補助金事業（女性新法モデル事業）〕
- シェアハウス：3 階 4 室で共同生活を運営。年度末時点で 3 名が居住。当初想定し

た「未支援の少女」にとどまらず、複数の支援機関が関わる 30 代までの女性へと対象を柔軟に広げた。「出ていっても帰ってくる」関係が自然に生まれ、住人がアウトリーチやワークショップの担い手へと回る変化も見られた。〔サントリー「君は未知数」基金〕

・ステップハウス：自立へ向かう中間的な住まい。近隣のワンルーム（11 月～、現在 2 室）と文化アパート（2 月～3 室）を借り受けて対応した。年度末時点で 3 名が居住。〔京都市若年被害女性等事業補助金事業（女性新法モデル事業)〕

（3）わかくさリビング

2 階を活用した、少女だけが集う場である。月 1～2 回のお楽しみ会や合宿・お誕生会などを行い、利用者は月あたり約 30 名であった。地域のイベントへの参加や困りごとへの対応へと展開する動きも生まれている。〔サントリー「君は未知数」基金〕

（4）寄り添い支援

個別の支援を必要とする少女・若年女性への寄り添い支援を行った。本支援は、京都市若年被害女性等事業補助金事業と、京都市 犯罪や非行をした者の居場所づくり等支援事業の双方によって支えられている。

前者は、入所者や来所者への寄添い支援、行政や他団体からの相談、電話相談等に対応した。希望者にはフェミニストカウンセリング（利用者 20 名）を行った。入所者には、個別の個別の有資格者が対応し、各月に 1 回スーパーバイザーを行った。

後者では、保護観察対象者を中心に計 6 名への個別支援として、行政・病院・警察等への同行、居宅・就労・学習支援、手づくりごはんの提供、宿泊見守り、医療・行政・保護観察所との連携やケース会議などを、「否定しない・受け入れる・共に次を考える」姿勢で継続した。

（5）少女の主体性を育む事業（表現・回復のプログラムを含む）

少女たち自身の「やりたい」を応援し、表現・交流・体験を通じて「主体的に生きる力」を取り戻すための支援を行った。支援される側にとどまらず、少女が活動を担う側へと回る経験を重ねることを大切にしている。〔サントリー「君は未知数」基金〕

<u>わかもの起業塾</u>

少女の「やってみたい」「なってみたい」を、多様な人々とともに実現するプログラムである。本年度は 12 のプロジェクトが動き、通信制大学への進学、市役所前での月 1 回の演奏（バンド結成)、冊子制作、伝統産業（絵付け等）の体験、伴走型支援士の受講などへとつながった。

<u>表現・回復のプログラム</u>

「言葉が生まれる場所」のワークを継続し、ここで集めた詩を、本年７月に冊子「わかくさⅠ」として発行する予定である。あわせて、アートスタジオ、ヨガ教室、整理教室などを実施し、自分の経験を言葉にし、つながりを取り戻す機会を重ねた。

少女発の商品化・発信

少女たちのアイデアを形にする取り組みとして、マスコット「ぷにょぷにょ」の商品化（1 月・1,000 個)、年末年始の福袋制作（100 セット。市民に配布するとともに、更生保護施設・京都 YWCA・社会福祉協議会等へ寄付)、オリジナルバッグの制作（150 枚)、わかくさソングの制作を行った。また、少女が主役となるおまつり「わかくさ WEEK・わかくさ DAY」を開催した。

４　わかくさ本体としての活動

（１）法人運営

理事会・社員総会等を開催し、法人運営にあたった。本年１月には団体設立 10 周年（法人設立８周年）を迎え、「わかくさまつり」を開催した。

理事会４回、社員総会１回開催

（２）助成金獲得の取り組み

当法人の活動資金は助成金に多くを負っており、その獲得は活動継続の生命線である。本年度も複数の助成・補助に申請し、採択を得た。なお、休眠預金活用事業については２件を当方の都合により取り下げた。

（３）広報・発信

・ホームページの改訂（作業途中。プロボノ／サービスグラントの協力）
・わかくさだより VOL６発行
・SNS による発信（Facebook、Instagram）
・わかくさソングの制作〔サントリー「君は未知数」基金〕
・ぷにょぷにょグッズの制作〔京都地域創造基金〕
・詩集・冊子等の制作（心音さん「贈り物」、わかくさだより 等）〔サントリー「君は未知数」基金〕

（４）研修・育成、組織体制の強化

・スタッフ研修の機会を拡充し、支援者としてのスキル・意識の向上を図った。
・インターンの受け入れを行った。
・組織体制の強化：理事の増強、社員の雇用、税理士機能の強化に着手した。
・日本ソーシャルイノベーション学会論文発表

５　今後の展望（令和８年度）

本年度の活動のなかから、新たな芽や必要とされるものが見えてきた一方、解決に至っていない課題も多い。これらを実現するべく令和８年度は以下に取り組む。

・RUKAHOUSE の新設：少女がゆっくり休める場として開設する（7 月オープン）。
・わかくさクリエイティブ室の新設：少女の就労支援と新たな発信の拠点とし、「君は未知数」事業と接続する。
・ホゴちゃんハブの継続：「ホゴちゃん HUB から広がる食と居場所の地域支援事業」（福祉医療機構）として、新たな場での展開を図る。
・京都ユースクリニックとの協働：夜間の若者の居場所「ここにいていい」を軸に、アウトリーチとピアサポート体制を強化する。
・冊子「わかくさⅠ」の発行（7 月）。
・組織本体の強化（人材・財政・運営体制）。

6　決算報告

本年度の収支計算書・貸借対照表および各事業の決算明細は別表のとおりである。主な事業の助成額および収入を参考までに掲げる。

日本更生保護協会	2,083,850	
京都府こどもの城事業	652,000	
京都府物価高騰事業	710,000	
サントリー君は未知数	4,820,000	～2026/9 まで
京都市男女共同参画事業	3,895,547	
京都市居場所づくり事業	449,000	
京遊連社会福祉基金	400,000	2026 年度に活用
京都府共同募金	100,000	
京都地域創造基金（FUN＋）	300,000	
アイフルホーム基金	1,000,000	2026 年度に活用
NTT データ助成金	1,988,800	
京都地域創造基金 （クラウドファンディング）	83,000	
ルカ基金	500,000	2026 年度に活用